慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大佛師康助の遺作に就いて
Sub Title	Works of the buddhist sculptor Kojo
Author	岡, 直己(Oka, Naomi)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1951
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.1, (1951. 12) ,p.76- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	美術学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00010001-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大佛師康助の遺作に就いて

岡　直　己

一

大佛師康助は文献に依れば、保安二年（一、一二一）より久壽二年（一、一五五）に亙つて造像活動を爲した作者で、七條佛所系圖では大佛師定朝の嫡流とし、第四世大佛師としてゐる。

斯く文献上の活躍を知るにもかかはらず、その遺品は全く湮滅して了つたのか、いたずらに名聲を傳へてゐる觀に過ぎない。果してそうであらうか。

私は金剛峯寺大日如來坐像に彼の作例を見ようとするものである。

二

金剛峯寺像とは、もと高野山の谷上にあつた舊大日堂の本尊を指すのであつて、脇侍の阿彌陀坐像並びに釋迦如來坐像[註1]と共に、現在は高野山靈寶館内の放光閣に出陳されてゐる像である。

さて本像の造形樣式を考察するに際して、その考察の階梯となる可き依據を、對象の觀察に依つて指摘して行く方法を取りたい。

大日如來坐像は五尺五分[註2]の像高で、五如來の寶冠を戴き、群青で塗られた寶髮を垂れ、瓔珞及び輕妙な天衣を着け、二尺九寸五分の高さの臺座に安住して居る巨像である。此等の着衣は肉身と共に漆箔塗りで金色燦然としてゐて、智拳印を結ぶ金剛界の大日を仰ぎ見得る。

本像は寄木内刳りの藤原時代通有に見る構造である。藤原時代に見る如來型の表現法は、中央樣式のものにあつては一定の方式に則つて居る。卽ち像の白毫から結跏する足もとまでの長さと像の膝張りの長さとは略々相等しい數量を示してゐること、更にま

た此の相等しい數量を基準として像の構成が一定の數量の比率に取られてゐることである。此の典型的な姿のものとして藤原時代の如來型の中では、[註3]先に安養院大日如來像を擧げ、此れに藤原的類型化の特質を認めたものであるが、それと此の像を比較對照[註4]すれば次の如くである。

	安養寺像	金剛峯寺像
白毫から結跏趺坐とも足るせ	1	1
膝張	1	1
兩肱の張り	$\frac{4}{5}$	$\frac{3.5}{5}$
兩肩の巾	$\frac{2}{5}$	$\frac{3.3}{5}$
顏面の横巾	$\frac{1}{5}$	$\frac{1}{5}$
顏面の縱巾	$\frac{1}{5}$	$\frac{1}{5}$
寶冠	$\frac{1}{5}$	$\frac{1}{5}$
顎下から智拳印	$\frac{3}{5}$	$\frac{2.9}{5}$
膝の高さ	$\frac{1}{5}$	$\frac{0.8}{5}$

この結果から次のことが云へる。即ち金剛峯寺像は藤原時代の木割法に依る構成に從つてゐるとは云へ、安養院像に見る如き整除された數値で構成されてゐるものではないといふことが其の一つであり、更に兩肱の張り、肩巾、顎下から印相する手までの距離、膝の高さ等を示す比率が相違してゐることが其の二つである。

次に視野を狹めて顏面に注ぎ、信仰の對象上重要な役割をもつ相貌に於ける構成關係の觀察に及ぼう。

顏部の考察に於いては二つの點に注目したい。一つは顏面内の目鼻だちの大きさを個々の數値で見ること、二つにはその目鼻だちが顏面内に於いて如何に配置されてゐるかの關係を數値で見て行くことである。

此處でも安養院大日如來像及び釋迦文院[註5]大日如來像と比較對照しよう。これには眼裂の長さを基準として各寸法を數値で示せば次の如くである。

	顏縱	顏横	眼裂	鼻	鼻張	上唇横	下唇横	耳
金剛峯寺像	三・〇	三・三	一・〇	〇・九	〇・七	一・〇	〇・八	二・六
釋迦文院像	三・一	三・四	一・〇	一・〇	〇・八	一・〇	〇・八	二・八
安養院像	三・四	三・二	一・〇	一・〇	〇・八	一・〇	〇・八	三・〇

此れに依つて次の三つの事柄が分る。即ち顏面縱巾より横巾の方が廣いこと、鼻及び耳の比率が小さいこと、目鼻口の比率關係が大體の傾向を同じくしてゐることとは云へ金剛峯寺像では他の二像程に一定の比率に整へられてゐないことである。

更に目鼻だちが顏面内に於ける配置關係の比率を見れば次の如くである。

	目の位置	鼻の位置	白毫の位置	口の位置
金剛峯寺像	らか側内 0.25	らか際え生 0.8	らか際え生 0.55	らか側鼻 0.4
	らか側外 0.33	らか頤 1.2	らか眉 0.5	らか頤 0.7
安養寺像釋迦文院像	0.3〜0.3	1.0〜1.0	0.5〜0.5	0.6〜0.6

此の配置關係の結果では、鼻を中心として顏面内に集中的に配されてゐて、安養寺像釋迦文院像の如くに外側的に配されてゐるものではないことである。

三

今度は形態上から如何に觀察せられるであらうか。手法、彫技をも含めた觀點から見て行かう。

像全體の纏まりは曲面でもつて簡潔に集成されて居る。しかもその纏まりは簡潔で丸々と見えるものであり、鎌倉時代のものに見る如き分裂的なものではなく、寧ろ定朝佛に於いて見られる簡潔な纏まりをその儘に見せてゐるものである。

佛體諸部の釣り合ひの狀態を云へば、顏部は圓やかな格好をなしてゐて、その顏部を含む頭部と胴體との附き具合がなだらかで、怒り肩でない圓味のある肩に暢やかに流れて行き、肩から手に落ちる邊りの圓味は兩膝頭に見る圓味と全く同趣のもので、その圓味でもつて形態を統一してゐるのであり、このことは本像の全形の基調的なものである。胴體では腹部の張り出し方が減つてゐて平安朝初期の佛像に見る如き氣力の感じは薄らいで居ることは、これまた定朝佛に見るものと同趣である。

圓やかな顏面では、眉は所謂蛾眉で圓の弧形をなし、目の格好は弓形で、上瞼はその弦となり、下瞼は弧となつてゐて、その開きは心持ち大き目であり、その瞳は圓形の半分近くが上瞼で隱されてゐるが、その餘は殆んど現はされ、下瞼で隱されてゐる部分は極く僅かである。

此の目は伏目であつて、觀者とこの眼差しが會ふところに佛の衆生濟度の心地が響き、他力的信仰の傾向の多い時には、來迎思想

に依つて始めて安住する人々は多く此の伏目を求めるのである。そして、此の伏目は實に定朝佛に於ける中樞的形式と考へられるのである。金剛峯寺像は鳳凰堂像の如き阿彌陀佛ではなく、大日如來の題材であるにも拘らず此の形式をその儘に繼承されてゐる處に、金剛峯寺像の著るしい特徴を見得るものと云へよう。

今度は着衣に就いてであるが、着衣の佛體に纏ひ方では、佛體が圓々としてゐるので衣も肉體にぴつたりと附いた樣になつて居る。その樣子を表はすものは襞であつてその膨味の彫り方が低く淺いので衣の裂地が薄いものと感ぜられ、臂と脇、股間、脛間などのやうな窪みにはその襞紋を多く設け、肩とか、膝頭とかいふ肉身の隆起した所には殆んど襞紋を作らないで、その裂地が肉身に附着する樣を現はして居る。そして裂地が肉身から浮いて襞紋の出來る場合は、襞紋の數を少くし且つその線が流暢であり、また並行的である。尙此の襞紋がいくつか相並ぶ時には努めて並行狀を取つてゐるが、それが相集る樣な時にはその集中が餘り目立たない樣にしてゐることが注目される。殊に結跏してゐる足の脛の前面にはこの處置が見られるのであつて、しかも此れを餘り多く作らず、足では膝頭や脛の上面には襞をあまり多く設けてゐないことゝ相俟つて像面を滑らかに見せ、又其處に靜かな趣を現はし、よく像の穩和な表情の內容となつてゐるのである。

一方には襞紋の線が暢やかに柔らかに身に纏ひ附かうとしてゐる樣子が見られ、他方にはその襞紋の起伏は徐々に起き、地が襞となつてゐる樣になつてゐて、それが彫刻面に生氣を薄らげてゐるものと見られることと相共に、像全體を靜かな趣を現はしてゐるのである。此の着衣に於ける襞紋の趣好も定朝佛に見るものと同じ傾向であると云へる。

次に技巧の點に就いて云へば、技巧の中でも特に刀法に關しては、刀法が細かいのであつて直截的のものの圭角が取れて行つてゐることが彫琢されたものと解され、婉曲して行くまゝに豪放の氣が影を薄くして來るといふ結果となつてゐる。それは益々纖細化されて行く途を辿り、藤原時代の小さい姿のものでは一層優美なものとなつてゐて、纖細化の現はれが明瞭となる。金剛峯寺像は巨像であり、且つ肥滿した姿である丈け技巧に於ける彫琢は可なりに洗練せられてゐるが、像全體を纖細化して了つてゐるものではない。

四

佛體の觀察から今度は光背及び天蓋へと視野を擴げて行かう。

先づ光背であるが、金剛峯寺大日如來像の光背は、その構造形式を云へば二重圓光で、緣は雲烟であり、それに十一個の浮彫りの飛天を附てゐる所謂飛天光である。

飛天光と云ふと、その代表的な且つ典型的なものとして平等院鳳凰堂の定朝佛の光背を想起する。此の鳳凰堂のものは二重圓光で、その緣は雲烟透彫りに大日如來及び六體の音聲菩薩を附けて居るものであつて、その形式は全く金剛峯寺像のと相通ずる。ただ金剛峯寺像では緣が透彫りではなく板裝となつてゐることが違つてゐる。構造上から云へば鳳凰堂のものは一枚板ではなく、所謂小部分を寄せて構成してゐて、透彫りにしたのは像の內刳りであることゝ規を一にして居るのである。それが金剛峯寺像も同樣に內刳りも大きく行はれてゐて、一定の木割法も遵奉せられて居り、光背も一枚板ではなく寄木であるのだから、板裝になされてゐるのは構造上の相違からではないことが分る。

次に天蓋に移らう。

この飛天光が天蓋を伴つてゐたことは、この天蓋が現在高野山靈寶館に出陳されて居ることに依つて分る。谷上にあつた大日堂は既に湮滅に歸して了つたので、その昔日の堂內の裝嚴は知る由も無いが、僅か一片の天蓋に善美を盡されてゐた當時の面影をしのぶことが出來る。

天蓋は中央に直經三尺八寸一分の鏡を嵌め、その周邊には八葉の蓮瓣を附けてゐる。この天蓋も飛天光の雲烟に見る如く板裝のもので、光背と天蓋との關連が現はされてゐることを知られる。

ここで八葉の蓮瓣のことに就いて云へば、これは天蓋ばかりでなく、尊像の寶冠にもあり、下に降つて臺座もまた八角形であり、更にその框の裝飾に八葉蓮瓣を輪の中に浮彫りにしてゐる紋樣が施されてゐることが注目されて來る。

これ等八角形基調を主題とした裝嚴の仕方は、これまた、鳳凰堂を想はしめるに充分な條件を具備してゐるものと云へよう。

それで透彫りでなく板裝のものであるといふことは費用の問題に依るのか、竣工を急いだ爲めか、或は技術的問題に依るか、その邊の事情はともかくも、天蓋、光背の飛天光、本尊の伏目であることと相俟つて一層定朝佛を追摸してゐる樣相が分るのである。

五

次には臺座を見よう。

儀軌に依れば大日如來像の臺座は蓮華座である。然るに金剛峯寺像のは所謂裳懸座であつて蓮華座ではない。このことは眞言密

教の根本佛であり、しかも儀軌を重んずる眞言密教の根本道場の地にあるだけ殊更に異樣に感ぜられる。

座の型から云へば藥師寺金堂藥師如來坐像の裳懸座の如き四角形のものではなく、八角形である。そして此の八角形は正八角形ではなく、正面背面に當る部分は二尺で、兩側面に當る所は一尺六寸であつて、この二邊に續いてゐる四隅に當る部分は各々一尺二寸五分の長さをもつてゐる。それ故に四角のものからその邊を截り取つて八角形に轉化したと見ることも出來よう。

今度はこの臺座の重層形式であるが、金剛峯寺像のは藥師寺、法隆寺などのものに見る如き簡潔な單層形式のものではなく、宣字形に加へて反花、三重框といふ重層から成り立つてゐる。臺座が時代的な推移を經て所謂九重座といふ寔に美しい形に落付いたのは光背に於いての事情と同樣に定朝に於いてである樣に考へられて來ると、斯の樣な推移が裳懸座に於いても同樣に考へ得られることは四角形から八角形へと展開して行つたことと軌を一にしてゐることゝ思ふ。

斯くて金剛峯寺像の臺座を蓮華座とし、それを重層形式に依つて所謂九重座で表はした方が儀軌にも合ひ、時代的な趣好にも適はしいのに、殊さら裳懸座で表はしてゐることは何故であらうか。

それに就いては裳懸座の樣相を見なければならない。それを三つの點で闡明したい。

その一つには裳の懸け方である。金剛峯寺像のは、中尊寺一字金輪佛頂坐像の裳の如く、佛體の裳が垂れて臺座に懸つてゐるものではない。寧ろ興福寺釋迦如來坐像の裳懸座と同一で、臺座の裳は佛體の裳とは別に、懸けられてゐる形式のものである。

更にその二つとしては臺座に懸つてゐる裳の褶紋の取り方である。金剛峯寺大日如來像の裳は單的に言ひ表はせば重疊複雜な褶紋といふことが出來る。これは前述した興福寺釋迦如來像の所謂裝飾的に整へられてゐる褶紋とは相違して居るものを云ふ。

然し此處に過看し得ない事實がある。それは此の大日如來の脇侍として阿彌陀如來と釋迦如來の兩像が現存してゐることは前述したが、この脇侍像の臺座も本尊像と同樣に裳懸座であつて、その裳の懸け方は孰れも本尊と同じ形式であるが、兩像に見る褶紋が重視される。

卽ち一方の釋迦如來像の臺座の裳に於ける褶紋は重疊複雜なもので、これは本尊大日如來像の裳に見るもの其の儘である。然るに他方阿彌陀如來像に見る褶紋は裝飾的に整へられて居るもので正しく興福寺釋迦如來像のものと同一であるといふことである。

それ故に此の金剛峯寺像の襞紋は脇侍を通して興福寺像の襞紋と密接な關係にある事實を知ることが出來る。

その三つには裳懸座に趺坐する尊像に關してである。奈良の地に遺存してゐるものは顯教寺院の關係上金剛峯寺像の如き密教關係の尊像は少ないが、裳懸座は各時代を通してそれぞれ見られ、此處に表現上の傳統が可なりに強く保持されてゐることが知られる。

とにかく此等の三つのことから、金剛峯寺像の裳懸座は少くとも傳統を踏襲してゐるもので、興福寺釋迦如來像のものに脈絡が認められるものである。

六

斯くの如く、四節に亙つて造形樣式考察の階梯となる依據を抽出して來たのであるが、此の局部的なるもの、分析的なるもの、個々的のものを綜合して相關連せしめ、再吟味すればどういふことになるか。

先づ課題の第一は佛體である。そして此の場合安養院像を擧げ、この像と比較して、兩肱の張りが減じ、肩巾を增し、顎下から印相する手までの數値が少くなつてゐることを指摘したのである。これを形態上から考察すれば肩と兩腕との關係となり、延いては印相を結ぶ兩腕の位置にまで及んで來る。そこで金剛峯寺像を見ると、この像では兩腕を左右一杯に張つてゐるといふよりも、印相してゐる手を上に擧げることのために兩腕を引き締めてゐるのであつて、これが腕張りの數値を減じてゐるのであることが分る。また腕を擧げて印相を高く擧げて印相を高く持すと肩にも力が加はり、それを表はすには肩巾を廣くすることが好結果となる。

それで金剛峯寺像では腕並びに印相する手に力の表現を求めてゐることが分り、このことは安養院像とは求め方が相違してゐることを知る。安養院像では靜寂相に住して、力の表現といふものを一切排除し、視覺上から來る整然さに美を浮き出してゐたのである。從つて金剛峯寺像では幾分なりとも力の表現を求めてゐるために、比率上の整然さをも破つてゐるものであると解されるのであつて、此の特徵は本像の相貌の表現にも關連して行くのである。

そこで相貌であるが、金剛峯寺像の目鼻だちの數値が安養院像に較べて整然さを缺いてゐたことが指摘され、鼻が小さくなり、目鼻だちの配置が顏面の中心に集中されてゐる關係が見られたのである。

このことは安養院像では目、鼻、口の各々が顔面構成上均分に配されて特に目立つもの、主導的な役割に立つものを避け、その意味で佛の靜寂といふ眼目を達し、配置上からは廣い範圍に分散されてゐたのである。

これに對して金剛峯寺像では伏目を中心として、他の諸器官はこの目的に副ふために、顔面の中心に集められてゐる配置である。卽ち目と目の距離も近いし、鼻の長さも短く、鼻と口との間も狹められてゐて、目鼻だちが相接近してゐる丈けに相互の機能關係も緊密の度を加へることになり、靜的顔面そのものの表はれではなく動的顔面の現はれを見得るのであつて、其處には表情をも含めた生氣ある相貌と解することが出來る。斯くてこの目の働らきに本尊と拜者との間に結ばれる本願がなされるのである。

この相貌の生氣は圓成寺大日如來像[註6]では、積極的な力の表現にまで止揚せられ、回想的な力に換元されてゐるものとなつてゐるが、金剛峯寺像では圓成寺像の如くにまで止揚されてゐないが、其處に相通ずるものがあることは見逃し得ない點である。

第二には形態上の觀察から佛體は像全體の簡潔な纏まり方、同趣の圓味を基調として形態を統一してゐる點、着衣の纏ひ方及び襞法の表はし方など定朝佛に見るものと同趣のこと、定朝佛の中樞的形式と考へられる伏目の相のこと、技巧の洗練されてゐることなど孰れも定朝佛を繼承してゐる有樣を知つたのである。

第三として光背及び天蓋の形式を見、それに依つて益々定朝樣式に結びついて行く徑路を辿つたのである。

第四には臺座を見、一方にはその重層形式を採用してゐる點に定朝との關連を認め、他方には裳懸座の形式並びにその臺座に懸る褶紋關係からは興福寺釋迦如來坐像との結び付きが考へられたのである。

斯くの如く指摘して來たものを綜合して次の如きことが言へよう。

金剛峯寺像は中央樣式のものであつて、この像は「被寫定朝造佛」[註7]を繼承して居り、圓派である佛師圓信の作と考へられる安養寺像とは明瞭に相違し、興福寺釋迦如來像、圓成寺大日如來像など地域的には南都關係諸佛と結ばれてゐるものであるといふことである。

七

飜つて今度は文獻上から見よう。

高野山關係の文獻には此等の三尊を安置して居た舊大日堂に關

しては少くとも二説の依據があると見られる。

即ち一つは高野山通念集に云ふもので、谷上の條、大日堂には次の如く見える。

此堂は長元年中(一、〇二八―一、〇三六)御一條院の御願、七堂伽藍草創の一宇、本尊大日如來の五佛を安する故に金剛心院と號す。寛德年中(一、〇四四―一、〇四五)の回祿に荒涼の地となり、美福門院、舊地の靈場なるを聞し召され、伽藍悉く再興したが、其の後又災にかゝり、此堂のみ存す。

此の記載に依ると舊大日堂本尊は美福門院の御願に成り、金剛心院の七堂伽藍中殘存の一宇の像と拜察するものである。

他の一つは高野春秋編年輯錄に散見するものである。同書第六天養元甲子二月十五日の條に[註8]

宇治入道殿下忠實公御登山。

のことが見え、久安三年の條には

谷上金剛心院及南北二塔。煥乎大成矣。天養元年宇治入道殿下忠實御登山已來賢檢校承之創造四年而成就畢來年賴長公御登山爲落慶之起本也

とあり、更に久安四年三月十四日の條には、

內大臣賴長公御登山奉爲宇治入道殿下塔院落慶。大導師檢校琳賢師。內府御着座。號給華額於金剛心院。

とあることである。此等の記事は如何にも高顯者の登山といふことを强調してゐる如き書き振りとは云へ、宇治入道御願落慶に依るものと察せられ、明治四十四年編纂の紀伊續風土記では此の說を引用してゐる。

然るに高野山通念集も高野春秋編年輯錄も共に元祿年間(一、六八八―一、七〇三)の結集であつて、兩書結集の年月の開きは十年を越えるものではない。それであるのに拾錄されてゐる史實と結集までの間は五百年以上も離れてゐる。故に編纂が前だからといふ理由のみで信を置くことは出來ない。

また拾錄されてゐる事實に就いて見るに、高野山通念集に云ふ御願美福門院におかせられては、久安五年(一、一四九)に院號を賜り、永曆元年(一、一六〇)に崩御ましませるが、深く佛法に歸依し給ひ、造寺造塔造佛には一方ならぬ御配慮を賜つたことは文獻の記載に依つて拜察される。殊に高野山には金泥一切經を納められ、荒川經藏を御寄進になられ、また菩提心院を建立せられて居ると傳へられ、當時の佛敎文化保持者として重要な位置を占められる方である。

更にまた高野春秋所記の入道忠實は保延六年(一、一四〇)の出家で、久壽二年(一、一五五)に薨去され居り、殊さら出家の

後は寺院堂塔佛像の造顯に關して多大の効績を爲して居ることが諸書に見え、從つて佛教文化保持者として特筆される一人である。

斯くして兩書に見える史實の內容は殆んど時を同じくして居り孰れの記載を依據としても金剛峯寺大日如來像は造形上の考察と相俟つて、保延年間から久壽年間に至る時代の樣式を見るのには都合のいい例證とならう。

さて藤原時代の造像界に於いて、本願者卽ち佛教文化保持者の相違は佛教文化保持者と佛師との關係が顧慮されて來るのであるから、時代樣式の範疇で視ようとする概念的考察の域を脫しても一歩考へを進めて見たい。

然し、實際問題として、文獻上の記載が集積されても、保持者と佛師とが判然と知られる遺品が尠く、文獻上から佛師が知れても遺品を識別することが困難であり、遺品に就いて作者を知ることも藤原時代の中央樣式のものでは難しいのである。

此處では遺品に看取される造形上の特質、延いては其の造形樣式上から文獻を客觀視して行く法を取り、記載上の不備を闡明にし、記錄上の事實を確認して保持者と佛師と遺品とを結びたい。

回顧して金剛峯寺像に就いては、この本願保持者を識別する條件として次の三つのものが留意されて來る。

第一には本像は宇治鳳凰堂の定朝佛を思慕してゐたことで、此處に本願者と佛師との脇力的な美の追求が考へられることである

第二には本像はその脇侍の裳懸座の形式、並びにその褶紋の表はれに依つて南都興福寺のものと直接に結び得たことである。

第三には、造立年代の相近い安養院大日如來像を對照して來たことで、安養院像は京都の佛所關係のもので佛師圓信の手に成るものと考へられるのである限り、金剛峯寺像は造形樣式がこれと異にして居て、興福寺との結び着きから南都關係のものと思はれることである。

斯の結果を綜合すれば、平等院に關係が深く、且つ南都の佛師と因緣關係が深い入道忠實が本願者として思考せられるのである。

八

然らば佛教文化保持者として入道忠實が高野山關係を中心として造像に關係してゐる事跡はどうか。

藤原師道の長子、富家殿關白忠實、卽ち前大相國は、百錬抄第六、崇德天皇保延六年十月二日の條に、平等院に於いて出家して居る。極めて華やかな儀式は中外抄の記載にても分り、尊卑分脈には圓理といふ號も見える。

其の出家して二年後の康治元年（一、一四二）五月十二日には叡山に登り、時を同じうして東大寺に戒壇受戒し、同年の六月二十九日には外記日記に依れば宇治に新堂を建てゝゐる。

是日入道大相國、於宇治小松殿北邊建立新堂、今日有供養（中略）、有勸賞幷赦人々、從四位上平知信（中略）、佛師法眼康助追可申請工給一階（下略）、

その翌年九月には四天王寺に詣し、三年後の天養元年二月十五日に高野山に登つてゐる。それは出家後五年目であるが、この高野登山は此の時が始めてではなく、長承元年（一、一三二）十月十七日、鳥羽院高野御幸に供奉として登つてゐる。それ故此度の登山は單に佛家の身として信仰上の靈場を訪れたといふよりも何か他の目的があつたかと察せられる。

然し高野春秋編年輯錄の記載は入道前相國の胸の一物には觸れてゐない、一七日間奥院に參籠し、先格に準じて導師檢校琳賢に依る法會を營み下山してゐるといふのである。

その間に堂塔建立の議のことも、佛像に關する御衣木加地のことも、堂塔斧入始めのことも記載には見えないが、久安三年十一月には前後四年を要して金剛心院の落慶供養のことがあるのだから、この登山の機會に建立の議が進められたことゝ思ふ。

然かも此の堂塔建造中には入道忠實の登山はなく、久安四年（一、一四八）三月十四日の落慶供養の際ですら、その子內大臣頼長朝臣を代參せしめてゐる程である。

高野山の堂塔が出來てから七年後の久壽二年（一、一五五）十二月に、入道忠實は甍去してゐるが、その年の二月二十七日に兵範記の記載する所に依れば、

被供養安樂壽院中不動明王堂、宇治入道殿爲鳥羽安鎭、去年十月始土木事、御所東庭造立一間四面檜皮葺白作御堂、奉居半丈六不動明王像一體居像、三尺二童子、二尺五寸五部夜叉等像、三尺五寸虛空藏、各一體、件御佛等、母屋壇中皆北向奉居之、康助法橋奉造之（下略）、

とあることが注目される。それ故に佛教文化保持者としての入道忠實は出家後、その死に至るまで造寺造佛に貢献したことを知り、此等の記載上からゆくりなくも佛師康助を得ることゝなつたのである。

九

然らば佛師康助は入道忠實と如何なる因縁關係が見られるであらうか。

康助は豪助と同一人らしく、[註9]僧綱補任の保安二年（一、一二一）には法橋であつたから、その造像活動は既にそれ以前から始められてゐたのである。そして中右記の大治四年（一、一二九）八月十六日の條に

召南京佛師豪助法橋、仰丈六佛事、令取舊佛寸法也、是已講依司奉作召豪助也、豪助庭前上洛、只今所下向、未時參富家殿、心閑申承世間事（下略）、

と見え、南京から已講覺心が奉る可き佛の用命で富家殿藤原忠實の邸へ參つたことが窺知される。覺心は顯密兩教に通じた高僧で興福寺の裏に常喜院を建て、莊田を購ひ、俊彦を召き、興律に力めた大德であつたから、康助を御願佛の造顯へ紹介の勞を取るに充分な地位にあつた。

同年十一月十一日の條に佛師長圓が興福寺大佛師職（中右記）、山階寺大佛師職（長秋記）を所望したといふ事件が起る。卽ち京都の佛所が興福寺關係にその勢力を伸ばして來たのである。此の時興福寺側では院宣とは云へ、「佛師長圓非興福寺人也、昔定朝被レ成二寺別當一、依二爲三本寺僧一也（中右記）」とて大衆が激怒し、此の事件の爲に山階寺別當で、興福寺別當、一乘院別當を兼務して居た玄覺は解職となり、山階寺已講覺譽も公職を停められたが、長圓の所望は達せられなかつたのである。ここの玄覺は入道忠實の叔父に當るばかりでなく、興福寺には入道忠實の血緣が居り、しかも要職を占めてゐた。一乘院別當覺英は忠實の息であるといひ、續いて同別當となつた覺繼は孫であり、覺安、尊覺、覺觀など孰れも血緣者である。

翌大治五年三月二十五日（中右記）の條には、

今日、日野新堂佛奉安置了、是奈良已講仰佛師康助法橋所奉造之材木、先日運日運度也、於作料者已講沙汰也、以七十餘人人夫從南京奉送也（下略）

とあり、藤原宗忠が日野に阿彌陀堂を造立しようとする時、奈良已講覺樹の仰で、康助法橋が日野へ七十餘人といふ大勢で材木を運ぶ樣が分る。この造佛は六月廿四日に供養して居るが、此處に東大寺東南院の覺樹の知遇を得てゐることが重視される。覺樹は當代稀に見る顯密兼備の碩學で、遠く宋朝迄も名聲を馳せてゐる高德である。尊卑分脈に依れば六條右大臣源顯房の息であり、入道忠實の室師子は顯房の女であるから入道忠實と覺樹とは義兄弟の仲となり、また藤原宗忠は入道忠實の母金子の兄弟であるから孰れも血緣關係に當るのである。

次に長秋記の長承元年（一、一三二）には山階寺豪助が藥師佛

十二神將を院に造進したことが知られ、同記の長承三年（一、一三四）八月廿一日の條には家成朝臣が八條堀川堂で康助造立の不動尊など四體を見てゐる。

保延六年（一、一四〇）の僧綱補任には

法橋康助 十月廿九日轉法眼院春日御塔造佛賞

とあつて法眼に昇叙されてゐる。保安二年に法印圓勢と肩を並べて康助が法橋に叙せられてゐた時は、長圓、賢圓、院覺の諸佛師は法橋にも叙せられて居ないのであるが、其の後十年を經て天承元年（一、一三一）の僧綱補任では、長圓が法眼となつて康助の法橋を追ひ越してゐるばかりでなく、その翌年の十月七日には長圓が法印となり、賢圓が法眼となり、院覺も二月廿八日に法眼に轉じてゐるにも拘らず、康助は依然として法橋であつたが、それが漸くにして法眼となつたのである。康治元年（一、一四二）には入道忠實本願の小松殿北邊の新堂諸佛を造顯してゐるのであつて、この頃に至つて入道忠實と佛師康助との因緣關係が更に深くなつたことを覺える。

康治元年の後僅かに三年を經て高野山大日堂の造佛が行はれてゐるのである。

即ち久安四年の落慶供養には入道忠實の寵愛兒頼長が父の代參として登山して居り、導師には仁和寺の覺任が勤めてゐる。

覺任は入道忠實が東大寺で受戒の會式の際にも役僧の顔觸れにその名が見え、まして初例抄の記載に依れば土佐守盛實の男とある。[註10] 頼長の母は盛實の女であるから、覺任は頼長の伯父に當り、血緣關係も深いのであつて、愛兒頼長の血緣に當る眞言宗の高僧を配した處に、父入道忠實のその子頼長に對する心遣りが分る。久安三年は忠實の七十の賀に當つて居り、入道忠實が大規模の造堂に際し、佛師康助を起用したことは、疑ふ餘地のないことであり、此處に康助の遺作を見ることが出來る。

高野山造立後の仁平三年（一、一五三）七月七日の兵範記の條には高陽院御願御佛の造顯のことがあり、高陽院は入道忠實の女帥子にあたらせられる。翌仁平四年八月八日（兵範記）には鳥羽殿新御堂の釋迦三尊を造顯し、翌日の勸賞には

法橋康朝 釋迦堂佛師康助讓

と見え、康助が既に老境の域に達してゐた時であらう。

そして其の翌年の久壽二年（一、一五五）の二月には入道忠實御願佛の安樂壽院不動明王像などを造顯してゐるのであつて、此の十二月に入道忠實が薨去するまで佛教文化保持者として彼の下に佛師康助が造佛してゐるといふ因緣關係が知られるのである。

以上述べ來つた丈けで遺品上から佛師康助の眞作とするには尙充分であるとは云へない。

然し佛師康助造顯の諸佛が如何に文獻所載に依つて知ることが出來ても、果してそれ等に該當する像が孰れであるかを遺品上から識別し得るものは未だに接して居ないし、佛師康助の遺作といふものは皆目知られてゐない。

また入道前相國忠實が本願して造顯された佛像も高野山の本像以外には全く手懸りとなるものが分らなくなつて了つてゐる。

それ故に金剛峯寺大日如何像が果して佛師康助の遺品であつても彼の造形的特質を比較檢討すべき遺品が他にないのである。斯くてこの像に見られる特質は康助の作風を示すものであり、其處に康助の造形形式を考へることが出來る以外に、手懸りはないのである。

十

最後に彫刻史上この遺品のもつ地位はどうか。

藤原末葉の大治年間を上限とし、仁平年間を下限とする約三十年間に於いて、造像銘に依つて、その製作年代が知られても、中央樣式と考へられるものはその數も尠く、仁平年間以前では殆んど適當な例に乏しいのである。

仁平元年（一、一五一）の造像銘ある長岳寺阿彌陀如來坐像は金剛峯寺大日如來像の脇侍阿彌陀如來坐像と比較對照するには便であるが、本尊と脇侍といふ間接的な關係にならざるを得ない。敢て對照すれば次の如くである。

即ち像全體が薄手な造りでなく、太造りとなつてゐて安底感に富んでゐること、螺髮が小粒であることが相似てゐる。

然し兩像は頭頂の高低の度合、生え際の丸味を帶びてゐるものと角張つてゐるものとの相違が見られ、殊に長岳寺像では衣文の並行襞に寫實味が强くなつてゐて、鎌倉的なものへの動きが見られるのは、金剛峯寺阿彌陀如來像の方が年代が古い丈けに古い樣相にあることが首肯される。

金剛峯寺阿彌陀如來像の衣紋の襞襞は此れと酷似するものとして伊豆の願成就院の本尊阿彌陀如來像を擧げ得る。願成就院像は運慶と結び付けて考へられる丈けに、圓成寺大日如來像との樣式關係が裏づけられて來ることにもなる。

金剛峯寺大日如來像は本尊性を表はすのに立體感を强く把持することに依つて成されてゐる。この本尊性の靜寂相といふ一つの理念の下に各造形要素を同じ方向に指示せしめて伏目といふ特徵

ある樣相で統一してゐる。

この求め方は運慶の圓成寺大日如來坐像に見るものと軌を一にして居り、同樣に藝術的にも優れ、佛師の手腕も分るのである。此の遣り方は安養院大日如來像の如く、靜寂相を表はすのに、視覺的に優美なものを洗練して、いはば繪畫的に均衡整美して構成してゐるのとは明瞭に相違してゐる。

そして金剛峯寺像では、その構成する各要素が總べて藤原的なものばかりであつて、運慶の大日如來像の如くに藤原的なるもの丶中に鎌倉的なるものが胚胎しつゝあつたのとは相違して居る。

それ故金剛峯寺像は圓成寺像の一段階前の樣相を示してゐるもので、久安三年造立であるから大佛師康助が主宰[註11]の下に成されたといふことは、康助、運慶と佛所に享けた精神が造形上に現はれた處の徵候と解されるのである。

斯くて定朝を飽くまで追求したと考へられる康助の作風は、それがまた運慶に連なるのであつて見れば、彫刻史上に於いて定朝と運慶とを結ぶ楔として、重要なる意義を認めるものである。

天喜年間の藤原頼通は大佛師定朝を得て宇治鳳凰堂にその美を傳へて居り、然して頼通の嫡曾孫である入道忠實はこれまた定朝門の嫡曾孫に當る三代後の大佛師康助を得て、高野山の地に久安の美を再現したのである。

遺品上から識別し得られたものが文獻上から指摘せられた事實と相俟つて、金剛峯寺大日如來像は大佛師康助の作と考へられる唯一の遺品と思ふものである。

註1　此の尊名に就いては異說をもつものであるが從來の尊名に從つて居く。

註2　紀伊續風土記では五尺三寸二分といひ、金剛峯寺調査錄では四尺五寸と報じてゐるがこれは余の實測に據る。

註3　拙稿、安養院大日如來坐像考、昭和十七年十一月三田文學美術特輯號所載參照。

註4　細かい寸法は省略する

註5　安養院像と共に高野山上の同樣式の大日如來像である。

註6　拙稿、淸淨心院阿彌陀如來立像考、昭和十六年十月三田文學美術特輯參照。

註7　中右記、兵範記、中尊寺文書などに散見してゐる。

註8　高野山興廢記、天養元年二月五日宇治入道殿下御參籠の記載あり。

註9　興福寺本に據る。

註10　覺任は覺仁と同一人らしく、式部家能の子（一說內大臣實能の子）ともいふ。家能は嘉祿二年に薨じて居り覺任は久安年代の人であるから家能の子といふことはない。また實能の子とすれば實能は保元二年六十二歲で薨じてゐるから覺任よりも若く子といふことはない。或は異母兄かも知れない。實能の室は宗忠の女で、宗忠の女が左大臣頼長の室となつてゐるから頼長と關係があつたと丶思ふ。

註11　康朝は彼の下に働いてゐたかも知れない。